



岩井護

踏絵奉行

講談社

踏絵奉行

著者 岩井 護

発行者 三木 章

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―二二―二一
〒一―二二 振替東京八一三九三〇
電話東京(〇三) 九四五―二二―一 (大代表)

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

第一刷発行 昭和五十七年一月二十日



定価 一、二〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

© Manoru Iwai 1982 Printed in Japan

目次

第一部 黒幕
第二部 百鬼夜行
第三部 遠い海

三 五 〇

踏絵奉行

装帧 / 森秀雄 + 井上正篤

第一部 黒幕

一章

長崎奉行の竹中采女うねのしよ重次が、任地の長崎に赴任したのは、寛永六年七月二十七日のことである。

重次は翌日、代官・末次平蔵の案内でさっそく長崎の町を見て廻ることにした。

大橋惣左衛門と傍島五郎右衛門の二人の家臣が、重次に付き従った。

大橋惣左衛門は重次と同年の四十二歳で、子供の頃から重次の側近くに仕えてきた。どこへ行くにも、重次と一緒にいる。十三歳で、重次と共に初陣も戦っていた。慶長五年の関ヶ原役で重次の父の重利は家康方となり上方にあつたので、豊後の国許にあつた重次も家康方の黒田如水の陣に加わつて九州の石田方と戦い、年端もいかないのに天晴れなことだと、家康からその軍功を認められた。竹中家が豊後国国東郡高田一万石から府内（大分）二万石に加増となつたのも、重次の働きに負うところが少なくなかつた。

傍島五郎右衛門は大橋より十四年下で、二十八歳。重次の腹心というよりも、大橋のお氣に入りで、大橋が重次の供をするときは、たいていその供をしている。一刀流をよく使う。重次もいつの間にか、傍島の供を当然と思うようになっていた。

長崎は古くから拓けた内町と、その後の町の発展につれて人家の建てこんだ外町とに分かれています。町人の自治の行きとどいているところで、外町は代官、内町は四人の町年寄によって支配されている。

「わたしがご案内いたします」と末次平蔵が名乗り出ていた。

朝晩はすでに秋の気配が感じられたが、昼間の暑さは、真夏とたいしてかわりがない。陽が上り、朝露もとくに消えていた。

蟬が鳴きしきっている。最も騒々しい熊蟬の声にまじって、秋を告げる法師蟬が細々と鳴いていた。法師蟬のその声の分だけ、秋がしのび寄っていることになる。

重次は日除けのために家紋入りの陣笠をかぶっていたが、一段と輝きを増してきた日射しが、その黒い漆塗りの笠できらきら光った。

重次はすでに、汗びっしょりだった。

「もっと早くか、夕方にすればよろしゅうございました」

小柄の末次平蔵が、詫びるように長身の重次へ視線を上げた。

重次は、黙っていた。先ほどから重次は、胸に怒りを溜めていた。

これが、長崎か——と、眼につくものが癩の種だった。

幕府の直轄地である長崎は、わが国でも一番栄えた港町だと重次は聞いていた。さぞかし見事な町並みだろうと想像していたのに、町なかを流れる中島川は、なんらの人手を加えられない荒川にすぎなかった。おそらく洪水の跡だろう、深くえぐりとられた川岸が、赤茶けた地肌をあちこちにさらけ出していた。

重次の眼が、崩れたままになっている橋にそそがれているのに気づいた平蔵は、洪水のたびに橋が流されて困っていることを告げた。

長崎は平地に乏しく、山が海に迫っているのです、川の流れが急だった。日頃は子供でも歩いて渡れるような流れがいったん豪雨に見舞われると、逆巻く奔流となって橋を押し流した。

「なぜ、直さぬ」と重次は言った。

平蔵が一瞬、怪訝な顔をした。

「橋をなぜ、崩れたままにしておるのだとたずねているのだ」

「この長崎では……」と平蔵が言った、「橋はすべて、両袂の町がかりということになっております」
酒屋町から磨屋町に架っていたこの橋も、当然その二つの町で金を出し合うことになっておるのだが、どんな橋を架けるかで採めていた。どうせ洪水でまた流されてしまうのだから簡素な竹の橋でいいという者と、それではほかの町から侮られるので長崎一の立派な屋根つきの木廊橋にしようという者とで意見が分かれていたが、竹の橋にすることにどうやら話が決ったようなので、間もなく橋も架けられることだろう。

「そんなわけで橋の名は、酒屋町の者にとっては酒屋町橋、磨屋町の者にとりましては磨屋町橋、どの橋も、すべてそれぞれ二つの名前を持っております」

「なるほど、橋のことはそれでわかった。川岸の崩れたのは、どういうことになる。誰が直すのだ」

「そ、それは……」と平蔵が言い渋った。

「奉行の仕事だというのだな」

「では、誰だ？　なぜあのように、あちこち崩れたままになっておる」

平蔵にたずねるまでもないことだった。長崎は幕府の直轄地なので、当然奉行所の責任である。先任者の怠慢というほかはない。

だが奉行所に、それだけの資金がなければ、どういうことになる。幕府へ復旧費を願ひ出ることになるのだが、幕府の財政もこのところ苦しいと聞いている。えぐり取られたままになっている中島川の川岸が、幕府と長崎奉行の関係を教えてくれているようで、重次は前途の多難を直感した。

嫌な役を押しつけられたものだと、重次は思った。

「お命じくだされば、わたしが一切の工事を引き受けさせていただきます」と平蔵が言った。一切、というところに平蔵は力をこめていた。

「ほう、それはまた、奇特なことだのう」

「わたしもこの長崎で、代官という役をおおせつかっておりますので」

「それで、望みはなんだ」

「望み？ と申されますと」

「かなりの出費となるはずだ。まさか、ただ働きというわけではあるまい。なにか魂胆があるはずだ」
「なにをおおせられます」

「するとなにか、なんの見返りもなくいいというのか」

「よくやった、とお奉行様からお褒めのお言葉を頂戴するだけで結構です」

こ奴、聞きしにまさるしたたかな男だと重次は思った。

末次平蔵の父の興善は、筑前博多の豪商で、元亀二年の開港と同時に長崎へ移り住み、貿易で大いに財をなしていた。そのあとを継いだ平蔵は、朱印状を得て、呂宋や暹羅、交趾、東京、台湾といったところへ盛んに船を出していたが、元和五年に長崎代官・村山等安（東庵）の不正を幕府へ訴え、等安にかわって代官となった。目的のためには手段を選ばない平蔵の悪どさが、しばしば話題になっていた。昨年、平蔵の手代・浜田弥兵衛は、交易先の台湾で利害の縫れからオランダと紛争を起し、人質を得て帰国、平蔵の上申に基いて幕府がオランダとの交易を差し止めたので、オランダ側はたびたび積明のための使節を派遣してきたが、いまだに解決をみるに至っていなかった。そういうわけで、平蔵は幕府の要人にも顔が売れていた。

「よし、それではさっそくお前に頼むでしょう。間もなく秋の嵐がやってくる。それまでに崩れたところを直しておいてくれ」

「心得ました」

平蔵はいささかの痛痒も感じない態度で頷いた。

「褒めてやるのは、その工事が終つてからのことだな」

「はい」と平蔵が真顔で頷いたので、重次は思わず声に出して笑つた。

陽が上つて、一段と暑さがきびしくなってくる。重次はわずかな日蔭を縫うようにして、中島川添いに川上へと歩いていった。

「わたしがご案内致しますのはどうかと思いましたが、ちょうど途中でございませうので」と平蔵が立ち停つたのは、桜町の牢屋敷の前だった。

本博多町の奉行所から、五町ほどのところに牢屋敷はあつた。七百坪の広さのなかには、土分の者や神官、僧侶、女囚を収容する揚り屋あきりやといったものもあつて江戸の牢屋敷とかわりはなかったが、土地柄のせいで多数のキリシタンが牢に入れられていた。

そのなかに、ジェロニモ・デ・マセードというポルトガルの船長もいた。罪状をたずねると、宣教師をたびたび船で日本に運んでいたそうで、元和七年に捕えられてから獄中生活がすでに九年にもおよんでいるとのことだった。髪も髭も伸び放題で、とても人間の姿とも思えない。異臭が、ブーンと鼻にきた。

ひと通り牢の中を見て廻り、屋敷の外へ出ると、平蔵が重次にすり寄つてきた。

「いかがなものでしょう」と平蔵が言った、「手前の家はこの近くでございます。たいしたお持て成しもできませぬが、お立ち寄りいただけませぬか」

牢屋敷のある桜町の隣りは、勝山町だった。勝山町に、平蔵の家があつた。どうやら平蔵は、はじめから重次を自分の家へ招待する気で案内してきたらしい。

「折角だが、またの日にしよう」

すると平蔵は、無理に誘おうともせず、牢役人となにごとか囁き合ってから、重次を牢屋敷の裏手へ案内した。

荒寥とした空地があった。立木もなく、正午に近い強い日射しが、地面に照りつけていた。乾いた大地に、一段と乾いた土の盛り上りが幾つもあった。

「処刑されたキリシタンの墓でございます」と平蔵が言った。

重次は、無言で頷いた。そこが墓地らしいということは、空地に足を踏み入れたときから薄々感じていたが、その土盛りが処刑されたキリシタンの墓だと知らされて、重次は一瞬顔の強張ってくるのを覚えた。

重次は長崎奉行に任ぜられたとき、老中土井大炊頭利勝からキリシタンの殲滅せんめつを厳しく命じられていたからだ。

先の奉行の水野河内守信が参観の折りに呈出したキリシタンの名簿を見て、將軍家光は機嫌を損ねた。その名簿には、いまだ改宗に応じようともしない教徒たちの名が多数書きしるされていた。

水野はただちに罷免され、さてその後任を誰にしたものかと幕閣で協議が行われた。

土井利勝は、重次を長崎奉行に選んだ経緯をそのように説明してくれていた。

「貴殿を見込んでのことだ。西国はキリシタンの根城のようなものである。とくに長崎周辺には、いままって狂信的なキリシタンが多い。貴殿の力でもって、なんとしてもキリシタンを根絶やしにして欲しい」

そのあとで利勝は、肉づきのいい顔を綻はたばせながら、重次にこう言った。

「しばらくの辛抱じゃ。あとのことは、この土井におまかせあれ。決して悪いようにはいたさぬ」

暗に加増をはのめかす言葉だった。

土井利勝は幕閣内でも、最も力のある人物として恐れられていた。改易の嵐が吹き荒れている。幕

府の意に添わない大名が次々に取り潰されていた。それらの弾圧は、すべて土井の考え一つで行われているとさえ噂されている。

その土井から、特別に眼をかけていることを告げられて、重次は悪い気がしなかったが、同時に積然としないものを覚えた。それというのも、長崎奉行は家康の遺訓で、三千石以上の幕府直参と定められていたからだ。重次は小藩ながら豊後府内の二万石の城持大名だった。秀吉時代に長崎奉行となつた初代の寺沢志摩守広高が唐津城主であつたことを除けば、その後大名で長崎奉行となつた例もなく、重次で六代目を数えていた。現に先代の水野守信も、三千石の旗本だった。

なぜだろう……なぜこのおれが、長崎奉行にならなければならなかったのだ。キリシタンを取り締まるくらいなら、ほかに適任者は幾らでもいるはずだ。

重次は墓標のない墓の間を、ゆっくりと見て廻つた。足許から砂埃が舞い上ってくる。土盛りに、大小あつた。大人も子供も、永遠の眠りについていて、教徒たちの言葉を借りるならば、これで神の身許へ召されたということになるのであろう。

「惣左、人を集めろ！」

重次は足許の土盛りを視つめたままで、背後の大橋惣左衛門に呼びかけた。

惣左衛門が重次の前にとび出し、地面に片膝ついて、重次を見上げた。

「墓を暴く」と重次は言った、「死体を掘り出し、焼き捨てることにする。キリシタンはたとえ死者といえども、わが管内に置くことを許さぬ」

惣左衛門の顔が引き曇つた。その後ろに、傍島五郎右衛門が同じように控えていた。どちらも重次の言葉に、驚きの表情を見せていた。

「どうした？ なにをぐずぐずいたしておる」

急げ、と叫んで重次は、二人をその場に残して足早やに牢屋敷へもどつた。末次平蔵が小走りに重

次の後ろに従った。

「またもや現れた新任の奉行を見て、牢役人たちはうろたえた。重次は広い土間の片隅に置かれている床机に腰を下したが、すぐに立ち上ってそのあたりを歩き出した。両手を後ろに組み、足許に視線を落して歩き廻っている重次を、平蔵は眼で追った。

部屋に上って休むように勧めても応じようともしない重次に、牢役人はどうしてよいのか戸惑っていた。平蔵が耳うちすると、牢役人はただちに馳け去り、冷えた茶を満たした大ぶりの茶碗を盆に乗せて持ってきた。

恐る恐る重次に差し出すと、重次が手にとって飲んでくれたので、ようやく牢役人はほっとした顔になった。

「差し出がましいようですが」と平蔵が言った、「墓に手をつけられるのは、いま一度お考えになられたらいかがでしょうか」

「お前もそう思うか」と重次が言った。

平蔵が意外な顔をした。

「いったんはその気になったものの、重次は迷っていた。おそらく教徒たちを刺激して、かえってヤソの許へ走らせることになるだろう。手負いの猪が、いかに危険なものかということは、重次として知らないことではない。

重次は空になった茶碗を手にしたままで、考えこむように土間の片隅へと歩いていった。しばらくその場突っ立って、高窓から外の青空を見上げていたが、やがてくるりと向きを変え、平蔵の許へ歩み寄った。

平蔵が手を差し伸べて、重次から茶碗を受けとった。

「お主、幾つになる」と重次がたずねた。

「六十を一つ越えました」

「ほう、それはまた、長く生きたものだ。人生を五十とするならば、十一年もの釣りがくる」

「申しわけございません」

「ところで平蔵、お前にとって一番大切なものはなんだ」

「さあ……」

「金か？」

「以前はたしかに、そんな時期もございました」

「女か？」

「この歳では、むしろ煩わしいばかりでございます」

「だったら、なんだ」

「左様でございますなあ」

平蔵の顔から微笑が消え、真剣な表情になった。

「時、でしようか」

「時？」

「はい、もっと生きたいものです。一日も多く。そのための時が欲しいものです」

重次は頷き返した。

「ところでお奉行様は……と、平蔵が問いかけた。

「おれか」

家だな——と重次は即座に答えた。

「わずか二万石の小さなものだが、先祖から引き継いだ府内藩を、おれの代で絶やすようなことがあつてはならぬ。竹中の家には、七百からの家臣がおる。その家の者たちを加えると、かなりの数にな

る。わしの不徳で、その者たちを路頭に迷わすようなことがあってはなるまい」

重次はふたたび腕を腰の後ろに組むと、歩き出した。

「どうもわからん」と重次は言った、「なぜだろう、なんでまた、異国の神などを信じる気になるのだろう。それも並みの信心ではない。狂気の沙汰だ。いったい奴らにとって、この世で一番大切なものはなんだ。神か？ いや、そんなものではないはずだ」

「しかし信徒たちは死をも恐れず、神を讃えながら死んでおります」

「神が彼らに、なにをしてくれたというのだ」

「では、こういうことでしょうか」と平蔵が言った、「この世に大切なものなどなにもない。それで神を信じる気になるのかも……」

「ばかな、信徒がみんな、この世で天涯孤独の無一文だともいうのか。女房や子供もいるはずだ。それに、教徒は貧しい者ばかりではない。なに不足なく暮らしている者もいる。多くの家臣をかかえた大名もいる。それなのに……」

「人の心のなかまでは覗けませぬ。人は皆、心のなかにいろんな悩みをそれぞれにかかえているものでございます」

「その悩みゆえに、神に救いを求めるといふのか」

「はい」

「それはおかしい」と重次は否定した、「悩みは誰にもあるとお前は言った。ところがだ、その誰もが異国の神に惑わされるとは限らぬ。ごく一部の者だけだ。なぜだ。なぜ彼らだけが、ヤソを頼ろうとする」

「この世にはいろんな不幸がございます。幸せはたいてい似たり寄ったりのものですが、不幸は実さまざまで、いったいなにが不幸かわからないようなところがございます。たとえば、どうしても百